あとがき

一口に遺稿といつても色々の種類が考えられる。故人が生前原稿を完成し，発表を予定していながら色々の外的事情でそれが遅延していたといつた種類のものがその一つ，反対に故人が単に覚書のつもりでつくつた原稿であつて，もとよりそのまま発表する意図もなかつたといつた種類のものがまたその一つ。前者の出版に対しては社会的な意義の問題を除いて特別の面倒は起らないと思われるが，後者にいたつてはそれをそのまま発表してよいかどうかについて，故人の意志をめぐつて色々異つた意見が出るものと思われる。

本書に採録した故可児藤吉氏の諸論文は，その多くが教室の談話会で講演された点からみても，故人もその内容を世に問う意志を抱いていた点に疑はないが，そのまとめ方や資料の多少について故人は多くの不満をもち，一応講演用の草稿として記してみたものの，直ちに正式の論文とする積りもなかつたことは，われわれが生前からよく聞かされていた所である。しかしこれらいわば未完成の論文を未完成なるが故に永久にそのまま埋れさすには，その中にあまりにも多くの貴重なるものを含みすぎている，とわれわれは考える。これはすぐれた生態学者であつた可児氏の10年間にわたる汗と忍耐の結晶である。その思想はわれわれに教える所多く，新知見に富んだその資料は今後の研究に対して多くの重要なる手がかりを提供するであろう。またそのような意味で役立つことこそ可児氏の真に望んだ所でもあつたであろう。このように考えることによつて，われわれは故人の不満は知りつつも，敢てその諸論文をここに出版することに決定したのである。故人の気持を尊重しないという非難がかりに与えられてもわれわれはそれを甘受する。故人をよく知るわれわれは究極において故人もわれわれの決定に賛成してくれるものと信ずるが故にである。

草稿中はじめから殆んど完成されていたものは「晩春の川にて」及び「マユタテアカネの交尾産卵寸描」である。これらはかなづかいや図を除いて殆んど手を加える必要を認めなかつた。「下水溝の生態」もこれにつぐが，大部分はざら紙になぐり書きにされたままであつたので，字句の修正を要する点が若干あつた。なお表についても疑点があつたので直接原資料にもとずいての説明を附加した。（この論文は雑誌「生物科学第3巻第2号」に掲載）。

「王滝川の動物生態学的調査 I」は比較的丁寧に書かれていたが論文として全然不必要と思われる点及び「動物生態学的調査 II」と重複する部分が若干あつたので編者の一存でけずつた。「調査 II」の方は講演体にノートに書かれてあつたのを材料を傷つけないように注意しながら書き改めた。「加茂川におけるブユの分布」及び「流水における動物の生活状態」「堰堤工事」は何れもノート又はざら紙に書かれた草稿であるが，若干の文章や字句の修正を除いて原文を生かすことに努めた。「加茂川水温」については，篇中に記したように表及び図を除き，文章はすべて編者によつて書かれたものである。なお最初に挙げた二つの小品を除いて，他の論文では動物名はすべて学名だけで記されてあつたのを一般読者の便宜のため編者においてでき得るかぎり和名をつけ加えるか，あるいはまた何度も重複するものは学名をけずつて和名に改めた。和名はカゲロウ類は上野益三博士，トビケラ類は津田松苗博士，アミカ類は北上四郎博士，ユスリカ類は徳永雅明博士に照會してそれぞれ御教示を頂いた。これらの諸博士に対して厚

く御礼申上げる。なおそれ以外の和名は日本昆虫図鑑改訂版によつた。学名で訂正が行われたものは判明した限り新しい学名に変更した。いうまでもなくたとい草稿は古くても論文としては 1952年 の論文になるからである。表や内容についてもこの見地から訂正した所が若干ある。附図は多くは草稿にそえてフリー・ハンドで書かれてあつたのを編者（大部分は牧野四子吉氏，一部分は森下）が書き直した。図中の学名もできるかぎり和名に改めた。

学名の変更その他について必要と思われる部分には編者において脚註を附した。文章の訂正個所等にも註を附すべきものとは考えたがあまりにも煩雑にわたるのでこれは省略した。なお未完成の草稿である関係上資料の解釈のしかたその他について異論のでる可能性のある部分も若干はあると思われたが，この点は読者の判断におまかせすることにし，編者の意見をのべることはさしひかえた。

「下水溝の生態」を雑誌「生物科学」に掲載した際は編者の意見も註記したが，本書では他の論文とそろえるためにこれらは大部分省略した。なお全部を通じてかなづかいは新かなづかいに改めた。

草稿に対して上記のような諸改訂を施したことが，かえつて論文を傷つけることになりはしなかつたかという点が，編者の最もおそれる所である。編者としては可児氏の云わんと欲するところを，読者がそのまま受け取り得る形にしたいとの一念ではあつたが，可児氏にとつてはいらざるおせつかいであつたかもしれぬ。この点は地下の可児氏に対して深くおわび申上げる次第である。

本書に載せた論文中，「賀茂川におけるブユの分布」は，川の生態学として可児氏の最初にまとめたもの。この論文を出発点として，可児氏は川における生物分布の問題に深く没入して行つた。流水における動物の生活状態」に述べられている川の形態単位の把握は，これによつて，可児氏の研究が次のステップをふみ出す基礎をつくつたもの。ついで各種生物群の時間――空間的分布関係を通じて，川における生物社会関係をありのままに見出そうとする可児氏のいたましいばかりの努力は「王滝川の動物生態学的研究 I，II」を通じてうかがい知ることができるであろう。それとともに川の小部分における生物相互の生活関係，石面上の社会関係などが，生物社会の理解に必要な他の側面として可児氏の注意をとらえた。これらの研究成果は未整理の部分が多いとはいえ，一部分上記論文中に織りこまれている。

生物社会を構成する種類間の関係という問題が頭を離れることのない可児氏にとつては，川に赴かない日には陸上生物社会から問題の解決を求めようと試みた。本書の「下水溝の生態」のほか，「アキニレの生態学」，「蚊柱の生態学」など興味あるいくつかの研究がこのような観点から行われている。これらの川や陸におけるのこされた資料の多くを整理困難のため本書に載せ得なかつたのは，編者のもつとも遺憾とするところである。これらの整理は続けて行う予定であり，やがて本書の続篇として世に出す機会の得られることを希つている。

（1951年5月　森下正明記）